

御物本『更級日記』における藤原定家の文字遣について

宮崎 若菜

一 本稿の目的

藤原定家が「を」と「お」とをアクセントの高低で使い分けたとする大野晋氏（一九五〇年）の研究があるように、定家が同音の仮名を表すために複数の変体仮名を使い分けて用いていたことはよく知られている。また、矢田勉氏は定家が仮名遣を定める際に「一語一表記の方針」を持っていた可能性を指摘している。^①しかし、定家の文字遣には一語一表記を目指したにしては同一語内で漢字表記と仮名表記が見られる例がいくつもあるなど、例外となる箇所が多い。^②定家の文字遣の特徴を明らかにするためには全体的な調査をする必要があるもの、これまでの定家の表記体系の研究においては部分的な調査にとどまっており、十分ではない。

以上を踏まえ、本稿の目的は左の二点とする。

- ① 一語一表記かどうかを検証する形で定家本における文字遣の実態を明らかにすること。
- ② そのような文字遣がどのような基準で用いられるかを明らかにすること。

そして最後に、そのように表記することで定家は何を目指したのかを考えたい。

二 対象資料と研究の方法

本稿では植喜代子氏や迫野虔徳氏の定家の文字遣研究において研究对象となっているものの、いまだ本文の文字遣の調査・考察が部分的である定家本『更級日記』^③（以下、御物本『更級日記』）を対象資料として選択する。

研究の方法としてはまず本文全文の品詞ごとの異なり語数を調べる。次に用例が複数ある語を一語一表記かどうかという観点から分析し、非一語一表記の語について考察する。

三 定家の文字遣の実態

「表記」という言葉は多義的である。本稿では仮名遣のみならず、字種や字体差などをも包括した用語として、「表記」という語を用いる。すなわち、読者が視覚的に認知することができる字種や字母・字体の

異なる用例がある語を、表記上の有意差を持つ語として捉える。⁽⁴⁾

これを踏まえたくて御物本『更級日記』において一語一表記の語と、一つの語につき一つの表記に固定されていない語（非一語一表記の語）がどれほどあるかを明らかにするため、本文中の異なり語の中から用例が複数ある語を抽出して考察する。御物本『更級日記』本文において異なり語が最も多く見られるのは名詞であるので、第二項、第二項では名詞を中心に考察し、第三項で全体の概観を述べる。

1 漢字表記と仮名表記を持つ非一語一表記の語の割合

名詞を含む、活用のない語は基本的に活用して語形が変わることがないため、語の表記が固定化しやすいと考えられる。そこでまず、活用のない語の漢字表記と仮名表記の字種の使い分けについて調べる。次に示す表は活用のない語である名詞、副詞、形状詞、代名詞、感動詞、接続詞、助詞、接頭辞、接尾辞の語を対象として表記を調べ、用例が複数ある、四三二語の表記の内訳とその割合（小数点第一位を四捨五入した数）をまとめたものである。

これを見ると、用例が複数ある語（五八二語）のうち、一語一表記にあたる語は二九四語であり、非一語一表記の語は二八八語である。この非一語一表記の語の中で、さらに仮名表記のみの語と漢字表記と仮名表記の両表記を持つ語を抽出すると、それぞれ一八一語と一〇七語であった。

つまり、活用のない語においては全体の約四九%が非一語一表記で

あり、全体の約一八%にあたる、一〇七語が漢字表記と仮名表記の両表記を持つということが分かる。

活用のない語における漢字―仮名の両表記を持つ語の割合				/	用例複数	一語一表記	非一語一表記
割合	100%	51%	31%	18%			

2 仮名表記のみの非一語一表記の語の割合

いま名詞について見てみると、御物本『更級日記』本文の名詞の「全語」は九五一語であり、用例が一例しかない語を除いた用例が複数ある語は四三二語である。このうち、一語一表記の語は二二五語、非一語一表記であるということになる。仮名で書かれる語の中には例えば硯を「すゝ利⁶」と書いたり「すゝ利⁷」と書いたりするような同一字母で異なる字体を持つ語も含まれている。しかし、そのような語は、一語全てが仮名表記の語（九九語）のうちの一語にとどまる。つまり、名詞における非一語一表記の仮名表記のみの語は、多くは字母の異なる（字体差が大きい）用例を持っているということである。

3 全体の概観

活用のない語全体について調べた結果を形態素／品詞別に「別表」表1（活用のない語）として示した⁹。これを見ると、一語一表記の語は二九四語で非一語一表記の語は二八八語であることが分かる。そして用例が複数ある語を母数とすると非一語一表記の語は約四九%を占めていることが読み取れる¹⁰。

次に、活用のある語の表記について調査し、活用のない語と同様に結果を「別表」表2（活用のある語）として示した¹¹。動詞については用例が一つしかないものを除くと三六〇語であった。そのうち一語一表記の語は一七八語、非一語一表記の語は一八二語であった。このことから、動詞においては約五一%の語が非一語一表記であるということが分かる。形容詞と助動詞においては一語一表記の語の割合の方が高いものの、全体的な傾向として、表2の結果からも、およそ半数の語が一語一表記というわけではないということが明らかとなった。

四 非一語一表記の語の使い分けの基準

では、非一語一表記の語は実際どのような語であり、どのような基準でその表記が使い分けられているのだろうか。そもそも、「使い分け」と言うほど定家は意識的に表記選択をしているのだろうか。

このことについて調べるため、用例が一〇例以上数えられる語を活用のある語、活用のない語のそれぞれにおいて抽出し、一覧を「別表」の表3（活用のない語）と表4（活用のある語）に示した¹²。

1 漢字表記と仮名表記の使い分けの基準

まず、当該語の中に漢字表記と仮名表記の両表記を持っている語の字種の使い分けについて考察する。紙面の都合上、ここでは詳細な用例考察を省略する。

特に用例数の多い「人」「事」「夜・ヨ（夜・ヨル）」「所」「物」の五語については、「人」や「所」のように用例の大多数が漢字表記によって占められている語と、「事」や「物」のように漢字表記と仮名表記の用例がそれぞれ一定数ある語とに大別できることが分かった。

「夜・ヨ（夜・ヨル）」は「二つの和語が一つの漢字を共有する場合には、一方をつねに漢字で書き、他方をつねに仮名で書いている」として小松英雄氏が挙げた語の一つであり、漢字表記と仮名表記の使い分けについては早くに小笠原一氏の論がある¹³。ここで「夜／よる」、「衣／きぬ」、「又／また」の使い分けについて考えたい。

「夜・ヨ」は仮名表記の用例が本文中に六例あり、常に漢字表記が選択されるわけではないことが分かる。また、『更級日記 總索引』（武蔵野書院、一九五六年）の読み方に基づくと本文中にコロモという語はないものの、キヌには漢字表記「衣」と仮名表記「幾奴（ゝ奴）」の両表記があてられている。「又／また」に関しても副詞「又」に漢字表記と仮名表記の二種類の表記が見られた。

このことから、定家は二つの和語が一つの漢字を共有している場合であっても常にどちらかの字種で書くなどの書き分けを厳密に行っているわけではないと言える。

用例の大多数の表記が一方の字種でほぼ固定している語の、少数派の字種が選択される基準を考えるため、「人」と「所」の仮名表記が見られる箇所を以下に挙げる。所在は丁数・オ(表)／ウ(裏)・行数の順に示す。傍線は私に付した。

〈「人」仮名表記全二例〉

四九丁オ一 ひとと見えてうちおとろきたれば

二五丁オ八 ひととまいらせよとおほせらるれば

〈「所」仮名表記全二例〉

三丁オ三 つる年ころあそひなれつるところを

六五丁オ一〇 しきにさへきところにめして

「人」の仮名表記全二例については、行頭に位置し、会話文中であり、当時の読者にとって指し示される人物が容易に分かるという条件の下で仮名表記が選択されたと考えることができる。

「所」の仮名表記全二例について、一つ目の用例は前行に漢字表記「所」があり、同一字体の隣接回避のために仮名表記を選択したと考えられる。二つ目の用例は前行の行頭に漢字表記「所」があるものの、

隣接しているわけではない。しかし、この例は六五丁表の最終行であり、六五丁裏の行頭に「圓融院の御世」が来るように、一行の縦幅を考慮して文字数の多い仮名表記「ところ」を選択したと考えられる。

以上のことから、少数派の字種（ここでは仮名表記）が選択されるのは仮名で記しても語の同定が容易である場合、あるいは同一字体の隣接回避の場合であると考える。

一方、次に示す表の通り、「事」や「物」のように漢字表記と仮名表記の用例がそれぞれ一定数ある語は、「人」や「所」ほど字種別の用例数の差が開いておらず、明確な使い分けがあるとは考えにくい。

		「人」「所」「事」「物」の用例数の内訳		
	漢字表記	仮名表記	計	
人	139	2	141	
所	50	2	52	
事	35	63	98	
物	29	15	44	

2 仮名表記の使い分けの基準

(1) 字母の異なる仮名表記の使い分け

次に、用例の全てが仮名のみで表記される語の中で字母の異なる仮名表記を持つ語について、前項と同様に用例数の多い五語を取り上げて考えたい。

字母の異なる仮名表記を持つ語で用例数が多いのは「いと」「此れ」「程」「哀れ(名詞)」「皆」の五語である。これらの語も「いと」「此れ」「哀れ(名詞)」のように、それぞれの語の中で一つの表記が圧倒的な割合を占める語と、「程」「皆」のように複数の仮名字体が同程度に用いられている語とがあることが分かった。

どちらの語群においても言えることは、御物本『更級日記』本文に

において少数派の字母・字体が用いられる場合には同一字体の隣接回避のため、ひいては読みやすさのためや、語頭・語末に用いることで語の識別を容易にするための工夫であることが多いということだ。ただし、それは決して徹底しているものではない。

(2) 位置によって使い分けられる変体仮名

仮名の「伊」「志」は語頭や行頭、あるいは同一字体の隣接回避のために用いられ、有標として機能する仮名字体であると言える(「別表」表5、表6参照)。

また、利を字母とする仮名の用例数は「利㊤」が二七例、「利㊦」が六五八例であり、圧倒的に「利㊤」の方が多し。しかし、語中であれ語末であれ、行頭にりが位置する場合には全て「利㊤」が用いられている。

このような文字遣は語のまとまりや行を意識して施されたものであると考える。

3 定家の表記選択の概観

用例が一〇例以上数えられる語の表記選択について概観すると、表3においては一二一語のうち七八語が当該語の中で複数の表記を持っていることが分かる。表4においても九五語のうち五六語が非一語一表記である。つまり、本文全体の文字遣の傾向としては、やはり一語一表記の方針があったとは考えにくい。

また、改行箇所あるいは行頭や行末に当該仮名が位置することによ

って補助字体が用いられたと考えられる例があるのは、表3では「いと」「此れ」「哀れ(名詞)」「にて」「物語」「気色」の六語、表4では「言ふ」「いみじく」「見る」「けれ」「おほえ」「わたり」「亡くなり」の七語のみである。

すなわち、仮名表記を持つ多くの語は同一字体の隣接回避のためでも、改行箇所や行頭・行末に位置する有標のためでもなく、複数の仮名表記を持っていることになる。

五 結論

定家の文字遣について分かったことは、左の三点である。

(一) 用例が複数ある語の約半数は非一語一表記の語であること。

(二) 二つの和語が一つの漢字を共有していても常に字種が固定しているわけではないこと。

(三) 徹底してはいないものの、一語一表記の方針よりも、改行や同一字体の隣接回避のための文字遣を選択することの方が優先されていること。

(一)は第一節の目的①に対応する結論である。これは第三節において述べたように、活用のない語では約四九%、活用のある語では約四七%が非一語一表記であったことから導いたものである。この傾向は定家本である伊達家旧蔵本『古今和歌集』でも見られたため、定家の文字遣の特徴と言って良いだろう。¹⁴⁾

(二)と(三)は目的②に対応する結論である。これは第四節において非一

語一表記の語を具体的に考察することで分かったことである。すなわち、必ずしも「夜」や「又」が常に漢字で書かれるわけではなく、場合によっては仮名が選択されることがあるというのである。

さらに、語頭や語末であるというだけでなく、改行や同一字体の隣接回避のために一表記しかなかった語に字種の異なる表記が新たに選択されたり、語中の改行位置に補助字体が用いられたりする用例が数多く見られた。このことから、定家の文字遣は一語一表記の方針よりも、改行や同一字体の隣接回避のために字種や字母・字体の異なる表記を選択することの方が優先されていると言える。

しかし、一語一表記を徹底するでもない定家の文字遣によって結果として字種や字母・字体の多様性が表現されているだけでなく、時に読者の誤読や読み飛ばしを防ぐ機能が生まれているのは事実である。表記に揺れのある語が本文の異なり語の約半数を占め、また常に同一字体の隣接を避けているわけでもない定家の文字遣の第一の目的は、その写本を読者にとって読みやすくすることであると考えられる。

一語一表記の傾向はありつつも、行頭や行末、同一字体の隣接箇所などで様々に文字遣を工夫していることは、定家が文字表記の配置に意識的であり、「読者の目」を持って古典籍の証本作成を行っていたことを物語っている。

注

(1) 大野晋「仮名遣の起源について」『国語と国文学』27(12)、一九五〇年十二月、矢田勉『国語文字・表記史の研究』(汲古書院、二〇一



二年、三三三頁)

(2) 御物本『更級日記』本文では、「こいへ」「こいゑ」「こ家」と三種で表記する例が看取された。また、一部の変体仮名(「伊」や「志」など)の用字を除けば、矢田氏の述べるように、定家は仮名字体のレベルにまで一語一表記を実現することはできていない。

(3) 本稿では『日本名筆選43 更級日記 藤原定家筆』(二玄社、二〇〇四年)を用いる。

(4) ただし認知のしやすさの度合いはもちろん異なっており、同一語内の漢字―仮名(字種)の使い分けが最も容易に認知でき、異なる字母の仮名の使い分け、同一字母であるが字体の異なる仮名の使い分け、という順で読者の負担は増加する。

(5) 一語の区切りは原則として『岩波古語辞典 補訂版』の見出し語であるかどうかを基準とした。『岩波古語辞典 補訂版』に見出し語のないものについては、形態素解析ソフト「Wep 茶まめ」と『新編日本古典文学全集26 更級日記』を参考に形態素の解析、分類を行った。また、同一字母のうち複数の字体を認める仮名を、植喜代子氏の論文「藤原定家の変体仮名の用法について」(一九七九年)と佐々木勇氏の論文「御物本『更級日記』の仮名字体について」(二〇一三年)の中の「御物本『更級日記』の仮名字体」表とを参考にして以下のように設定した。

・ナ		(奈@)、		(奈b)、		(奈c)
・カ		(可@)、		(可b)		
・オ		(於@)、		(於b)		

・ネ

(祢^㉑)、

(祢^㉒)

・ノ

(乃^㉑)、

(乃^㉒)

・モ

(毛^㉑)、

(毛^㉒)

・リ

(利^㉑)、

(利^㉒)

(6)

(7)

(8) これらを視覚的に認知することは、漢字表記―仮名表記の使い分け、あるいは異なる字母の仮名の使い分けを認知するよりも読者の負担は大きい。このことから、同一字母のうち複数の字体を認める仮名に使い分けが存する、とすることには懐疑的にならざるを得ない。しかし、少なくとも定家の文字遣の場合には、一部の音節（イヤシなど）において変体仮名の使い分けが存していると考えることが可能である。

(9) 表1、表2中の数は全て異なり語数である。

(10) 小数点第一位を四捨五入。

(11) 原形が同じであっても活用形が異なることで語形が異なる場合はそれぞれを異なり語として数えたため、活用のある語の全語数は省略する。なお、複数の活用形が同一語形を共有している場合は一つの語として数えている。

(12) 抽出語を一〇例以上としたのはより蓋然性の高い結果が得られると考えるためである。なお、表3、表4中の一語一表記の語の用例につ

いては省略した。

(13) 小松英雄『日本語書記史原論 補訂版 新装版』（笠間書院、二〇〇六年、一八一頁）、小笠原一『又』と『また』・『事』と『来』―定家自筆本に関して―（『学芸国語国文学』第八号、一九七三年六月）

(14) とは言え、一語一表記と非一語一表記の語の割合が拮抗しているという状況は、どのように捉えるべきなのだろうか。この点について明らかにするため、御物本『更級日記』に加え、伊達家旧蔵本『古今和歌集』と、定家と同時代の歌人である飛鳥井雅経（一一七〇年―一二二一年）の自筆本である雅経本『崇徳天皇御本古今和歌集』の文字遣を調査し比較した。その結果、定家の文字遣は一表記にとどまらないことが多い一方、雅経の文字遣ではかなり徹底して仮名が用いられているということが分かった。

(15) このような非一語一表記の語の仮名の実態を分析すると、イヤシのように基本字体と補助字体が明確に使い分けられている仮名と、モのように基本字体と補助字体が同一字母でありその用字基準が緩やかな仮名、そしてホのように複数の字母を持ちそれぞれが同程度に使用される仮名とが一つの写本内の文字遣に見られることが明らかになった。雅経本『崇徳天皇御本古今和歌集』のようにほとんどの語が仮名表記のみで表される写本は、漢字と仮名が同程度に用いられている写本と比べると表語機能や分節機能が弱い読みにくい。

(16) 課題として挙げたいことは二つある。

一つめは、用例数の少ない異表記を持つ語の捉え方次第で定家の文字遣の一語一表記・非一語一表記の語の割合は大きく変わる可能性があるということである。

二つめは、この問題については同一語内で基本となる表記とそれに対する異表記の使用率を考慮して分析する必要がある。

二つめは、定家の文字遣の目的についてである。雅経本『崇徳天皇御本古今和歌集』の他に伝慈円筆『古今和歌集』などの他者筆写本を比べても、やはり定家の文字遣は漢字の使用率が高い。仮に定家がふつう仮名で表記される語に漢字表記をあてているとすれば、なぜ漢字表記を選択したのかという疑問が残るのである。

この問いに対しては、ある語を書写する際に漢字表記を選択しているのか仮名表記を選択しているのかという語の字種選択の観点から文字遣を比較し、分析することで明らかにできると考える。

参考文献およびURL（筆者・作者五十音順）

〈文献〉

・東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『更級日記 總索引』武蔵野書院、一九五六年

・犬養廉校注・訳『新編日本古典文学全集 26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』、更級日記』小学館、二〇〇八年

・植喜代子「藤原定家の変体仮名の用法について」『国文学攷』第八二号、広島大学国語国文学会、一九七九年

・大野晋「仮名遣の起源について」『国語と国文学』27（12）、一九五〇年一月

・大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典 補訂版』岩波書店、二〇一六年

・小笠原一「『又』と『まだ』・『事』と『来と』——定家自筆本に関して——」『芸国語国文学』第八号、一九七三年六月

・久曾神昇編著『崇徳天皇御本古今和歌集』文明社、一九四〇年
・久曾神昇編『等間文庫影印シリーズ 2 伊達本古今和歌集 藤原定家筆』笠間書院、二〇〇八年

・迫野虔徳「定家の「仮名もじ遣」『方言史と日本語史』清文堂、二〇一二年、三九一頁〜四〇二頁（初出）『語文研究』37号、一九七四年

・佐々木勇「御物本『更級日記』の仮名字体について」『論叢国語教育学』9巻、二〇一三年、七七頁

・西下経一『古今集の傳本の研究』明治書院、一九五四年

・矢田勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院、二〇一二年

・米田明美編『重要古典籍叢刊 6 伝慈円筆 古今和歌集 甲南女子大学蔵』和泉書院、二〇一三年

・『日本名筆選 43 更級日記 藤原定家筆』二玄社、二〇〇四年

〈URL〉

・「広島大学 日本語史研究会『更級日記』語句検索」

(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/~isasaki/japanese/index.htm>) 二〇一七年五月二日

一日閲覧

・「Web 茶まめ」(<http://chamame.ninjal.ac.jp/index.html>) 二〇一七年五月二日

閲覧

(広島大学大学院博士課程前期一年)

表2 活用のある語

計	助動詞	形容詞	動詞	形態素／品詞
				全語
524 (100%)	75	89	360	用例複数
277 (53%)	52	47	178	一語一表記
247 (47%)	23	42	182	非一語一表記
51	4	16	31	同一字母

表1 活用のない語

計	接尾辞	接頭辞	助詞	接続詞	感動詞	代名詞	形状詞	副詞	名詞	形態素／品詞
1222	19	14	47	6	8	28	53	96	951	全語
582 (100%)	11	7	41	3	1	20	13	53	433	用例複数
294 (51%)	6	4	16	1	0	12	5	25	225	一語一表記
288 (49%)	5	3	25	2	1	8	8	28	208	非一語一表記
25	1	0	5	0	1	2	3	2	11	同一字母

表3 用例が一〇例以上の活用のない語

の	937	奈㉑止	5	物	44	乃㉑美	29	水	22	春	18	由幾	7	佐	5	佐部	2
乃㉑	844	事	98	物	29	乃㉑三	3	え	22	春	17	京	16	さ	14	如何-イカガ	10
乃㉑	71	己止	63	毛㉑乃㉑	10	乃㉑美	1	宮	21	者留	1	斯く	16	だに	14	以可㉑	9
ゝ	14	事	35	毛㉑乃㉑	4	を(接続助詞)	32	日	21	頃	18	加久	9	多尔	12	伊可㉑	1
能	8	いと	95	毛㉑乃㉑	1	物語	30	で	21	我-ワレ	18	加宇	5	太尔	2	辺-ワタリ	10
て	613	以止	90	や	44	物可㉑多利㉑	15	何	21	我	15	可㉑宇	1	他	13	和多利㉑	9
に(格助詞)	569	伊止	3	世	40	物可㉑多利㉑	4	奈㉑尔	17	和礼	3	可㉑久	1	保可㉑	12	和多利㉑	1
尔	552	以登	1	世	39	毛㉑乃㉑可㉑多利㉑	3	奈㉑尔	3	我-フ	18	影	16	本可㉑	1	跡	10
ゝ	13	伊登	1	与	1	物加多利㉑	2	奈㉑尔	1	まで	18	加計	10	冬	13	阿止	9
仁	4	是	74	人々	38	物加多利㉑	2	花	20	万天	13	可㉑計	4	時	13	阿止	1
も	386	己	73	入く	28	毛㉑乃㉑可㉑多利㉑	2	と(接続助詞)	19	未天	4	加遣	2	しも	13	元	10
毛㉑	325	古	1	比止く	10	毛㉑乃㉑可㉑多利㉑	1	夢	19	ゝ天	1	年	15	之毛㉑	11	毛㉑止	7
毛㉑	58	より	72	國	38	毛㉑乃㉑可㉑太利㉑	1	由女	11	が(接続助詞)	18	年	12	之毛㉑	2	毛㉑止	2
ゝ	3	与利㉑	68	久尔	36	げ	30	夢	8	可㉑	16	止之	3	仏	12	許	1
と(格助詞)	342	与利㉑	3	久仁	1	計	28	又	19	加	2	具処	15	仏	10	三	10
を(格助詞)	305	与里	1	国	1	介	1	又	17	椽-サマ	17	船	16	保止計	2	三	9
遣	304	ぞ	61	つつ	38	遣	1	万多	2	左万	12	舟	15	目	12	美	1
乎	1	夜-ヨ	56	川ゝ	28	が(格助詞)	28	只	19	左満	5	布祢㉑	1	女	11	三日	10
は	267	夜	50	徒ゝ	10	可㉑	26	多ゝ	11	風	17	昔	16	免	11	気色	10
者	220	与	6	ども(接尾辞)	37	加	2	堂ゝ	6	風	16	武可㉑	12	波	12	介之幾	9
八	37	程	56	止毛㉑	22	中	26	太ゝ	1	加世	1	昔	4	浪	9	計之幾	1
波	8	本止	29	止毛㉑	7	中	20	内	19	折	17	俣	14	奈㉑美	2	へ	10
ゝ	2	保止	27	ゝ毛㉑	7	奈㉑可㉑	4	内	14	於㉑利㉑	12	末ゝ	12	奈㉑三	1	な(終助詞)	10
ば	192	様-ヤウ	55	ゝ毛㉑	1	奈㉑可㉑	2	宇知	5	於㉑里	3	万ゝ	12	猫	12	奈㉑	6
者	154	其	53	にて	37	秋	26	音-オト	28	於㉑利㉑	2	満ゝ	1	親	12	奈㉑	2
八	28	所	52	尔天	35	今	26	かし	19	後-ノチ	17	如何に	14	身	12	奈㉑	2
波	10	所	50	尔帝	1	以末	13	可㉑之	14	乃㉑知	13	以可㉑尔	13	上-ウへ	12	雨	10
に(接続助詞)	183	止己呂	2	ゝ天	1	以万	9	加之	5	ゝ知	2	伊可㉑尔	1	猫	11	雨	7
尔	174	ばかり	50	こそ	36	今	4	皆	4	後	1	男-ヲノコ	14	猶	10	安女	3
ゝ	7	者可㉑利㉑	29	山	34	方(名詞)	24	美奈㉑	14	乃㉑知	1	遠乃㉑己	13	奈㉑遠	1	一人	10
二	2	許	18	山	33	此れ	24	美奈㉑	4	曉	17	遠乃㉑己	1	十	11	比止利㉑	7
人	141	者可㉑利㉑	3	也万	1	なむ	24	美那	1	安可㉑月	10	道	14	紅葉	11	一人	2
入	139	月	46	ど	34	心地	23	かな	19	安可㉑徒幾	4	美知	9	紅葉	6	比止利㉑	1
比止	2	衰れ(名詞)	46	か	33	心地	19	可㉑那	12	安可㉑川幾	3	道	5	毛㉑美知	3		
など(副助詞)	120	安者礼	45	可㉑	31	心知	4	哉	4	空	17	聲	14	毛㉑美知	2		
奈㉑止	109	安八礼	1	加	2	打ち	22	可㉑奈㉑	2	雷	16	然-サ	14	さへ	11		
奈㉑止	6	心	45	のみ	33	御-オン	22	加奈㉑	1	雪	9	左	9	左部	9		

表4 用例が一〇例以上の活用のある語

に(助動詞ナリ)	185	ぬ(助動詞ス)	60	なく(形容詞ナシ)	36	おほえ	21	ゆく	16	ざり	14	可 ^レ 留	2	近く	10
尔	184	たり(助動詞タリ・完了)	53	奈 ^レ 久	21	於 ^レ 保衣	20	たち	16	左利 ^レ	9	心ほそく	12	知可 ^レ 久	6
仁	1	多利 ^レ	32	奈 ^レ 久	9	於 ^レ 本衣	1	多知	8	佐利 ^レ	2	心保曾久	7	知可 ^レ 宇	4
たる(助動詞タリ・完了)	144	多利 ^レ	9	奈 ^レ 久	4	しら	20	太知	8	佐利 ^レ	1	心本曾久	4		
多留	130	太利 ^レ	6	奈 ^レ 宇	1	之良	15	かへり	16	佐里	1	心保曾宇	1		
多累	16	多里	4	奈 ^レ 宇	1	志良	5	加部利 ^レ	9	左利 ^レ	1	見せ	11		
太留	3	太里	1	言ひ	35	すき	19	加部利 ^レ	6	かへる	13	あれ	11		
堂留	3	堂利 ^レ	1	以比	33	なら(助動詞ナリ・断定)	19	可 ^レ 部利 ^レ	1	加部留	9	おそろし	11		
太累	1	思ひ	50	以日	2	奈 ^レ 良	16	ずる(助動詞ス)	16	可 ^レ 部留	3	入り	10		
堂累	1	思	43	見え	34	奈 ^レ 良	2	なき(形容詞ナシ)	15	可 ^レ 部留	1	以利 ^レ	4		
し(助動詞キ)	135	於 ^レ 毛 ^レ 比	3	ける	34	奈 ^レ 良	1	奈 ^レ 幾	9	然る	13	以利 ^レ	3		
之	133	於 ^レ 毛 ^レ 比	2	に(助動詞ス)	32	わたり	18	奈 ^レ 幾	5	左留	9	以里	3		
志	2	思日	2	ける	32	和多利 ^レ	13	奈 ^レ 幾	1	佐留	4	やみ	10		
む	115	べき	48	留	31	和多利 ^レ	3	なれ(助動詞ナリ・断定)	14	給ふ	13	也美	9		
なる(助動詞ナリ・断定)	108	ある	47	累	1	王多利 ^レ	1	思いて	14	給	12	也見	1		
奈 ^レ 留	54	し(助動詞ス)	47	見る	32	和多里	1	給へ	14	多万不	1	る	10		
奈 ^レ 留	49	ぬ(助動詞ス)	47	見留	31	しか	18	ぬる	14	ぬ(準ル)	13	つけ	10		
奈 ^レ 留	4	なり(助動詞ナリ・断定)	44	見累	1	之可 ^レ	14	くたり	14	為	12	川計	6		
奈 ^レ 累	1	奈 ^レ 利 ^レ	36	思ふ(終止・連体)	29	之加	3	久多利 ^レ	8	井	11	川介	4		
ず(助動詞ス)	108	也	33	思	19	之可 ^レ	1	久多利 ^レ	3	ね(助動詞ス)	13	まかて	10		
寸	81	奈 ^レ 利 ^レ	7	於 ^レ 毛 ^レ 不	4	幾め	17	久多里	1	らむ	12	万可 ^レ 天	8		
須	27	奈 ^レ 利 ^レ	1	思不	3	奈 ^レ 可 ^レ 女	12	久太利 ^レ	1	見れ	12	未可 ^レ 天	1		
書ふ	72	成り	42	於 ^レ 毛 ^レ 不	3	奈 ^レ 可 ^レ 女	2	久太利 ^レ	1	まし	12	涙可 ^レ 天	1		
以不	70	奈 ^レ 利 ^レ	22	けり	29	奈 ^レ 加女	1	たてまつり	14	未之	10	亡くなる	7		
以布	1	奈 ^レ 利 ^レ	14	けり	27	奈 ^レ 可 ^レ 女	1	多天万川利 ^レ	9	万之	2	奈 ^レ 久奈 ^レ 利 ^レ	10		
伊不	1	奈 ^レ 里	2	介利 ^レ	13	奈 ^レ 可 ^レ 免	1	多天末川利 ^レ	1	と	12	奈 ^レ 久奈 ^レ 利 ^レ	1		
いみじく	64	奈 ^レ 利 ^レ	2	介利 ^レ	11	な(助動詞ス)	17	多天万川利 ^レ	1	たつね	12	奈 ^レ 久奈 ^レ 利 ^レ	1		
以美之宇	33	奈 ^レ 利 ^レ	2	介里	3	奈 ^レ	14	太天満川利 ^レ	1	多川祢 ^レ	5	久奈 ^レ 利 ^レ	1		
以三之宇	3	あら(助動詞アリ)	41	せ(助動詞ス)	26	奈 ^レ	2	太天万川利 ^レ	1	堂川祢 ^レ	2	つき	7		
伊美之宇	1	せ(助動詞ス)	40	られ	24	奈 ^レ	1	堂天万川利 ^レ	1	太川祢 ^レ	2	徒幾	10		
あり(連用・終止)	63	れ	39	けれ	23	給ひ	17	きく	14	き	12	川幾	3		
安里	8	たれ	39	介礼	22	給	15	幾久	13	こ	12	たら(助動詞タリ・完了)	10		
安利 ^レ	44	多礼	37	計礼	1	給日	2	起久	1	おかし	12	多良	8		
安利 ^レ	11	太礼	2	いて	23	つる	17	言は	14	おかしき	12	太良	2		
見(未然・連用)	56	き	36	まいり	21	川留	15	かいる	14	かいる	12	すみ	10		
見	54	幾	34	万以利 ^レ	15	徒留	1	為	13	加 ^レ 留	8	あかき	10		
美	2	支	2	万以利 ^レ	6	徒累	1	井	1	加 ^レ 累	2	じ	10		

表6 仮名「志」の全用例

書字形	字母・字体	行頭／行末	原形	注記
しとみ	志止美		部	
もろこし	毛 ^① 呂己志	」	唐土	前行「之」
し	志 ^①	行末	き	前行「之」
し	志 ^②	行末	き	前行「之」
わたし	和太志	行末	渡す	前行「之」
しほ	志本		潮・シホ	
しくれ	志久礼		時雨	
しはず	志波寸		師走	
しのひね	志乃 ^① 比	行頭	忍ひ音	前行「乃 ^① 」
しけれ	志計礼	行頭	茂る	
しそく	志 ^② 曾久		親族	
しり	志利 ^②		知る	
しら	志良		知る	
しか	志可 ^①		鹿	
しり	志利 ^②	行頭	知る	
わひしう	和比 ^① 志宇	」	侘し	前行「之」
しり	志利 ^②		知る	
おはします	於 ^① 者 ^① 志万寸	」	おはします	前行「之」
しり	志利 ^②		知る	前行斜「之」
しのひ	志乃 ^① 日		偲ぶ	
しるへ	志留部		導	
しる	志留 ^①	行末	知る	
しの	志乃 ^①		篠	
しら	志良	行頭	知る	
しつやか	志徒也可 ^①	行末	静やか	
うちしくれ	宇知志久礼		打ち時雨る	
しら	志良	行頭	知る	
しら	志良		知る	
しも月	志毛 ^② 月		霜月	
しら	志良	行頭	知る	
しるし	志留之	行頭	しるし	
しら山	志良山	行頭	白山	
しり	志利 ^②	行頭	後・シリ	
しけり	志計利 ^①	行頭	茂る	

表5 仮名「伊」の全用例

書字形	字母・字体	行頭／行末	原形	注記
いかに	伊可 ^⑥ 尔		如何に	
いふ	伊不	行頭	言ふ	前行「以」
いと	伊止	行頭	いと	
いみしう	伊美之宇	行頭	いみじ	
いふかひなし	伊不加比奈 ^⑥ 之	行頭	言ふかひなし	
いし	伊之		石	前行「以」
いまた	伊万多	行頭	未だ	前行「以」
いつしか	伊川之可 ^⑥		何時しか	前行「以」
いかゝ	伊可 ^⑥ ゝ	行頭	如何-イカガ	
いと	伊登	行頭	いと	前行「以」止
いく	伊久	行頭	幾	
いと	伊止	行頭	いと	
いな	伊奈 ^⑥		否	前行「以」